

共生概念の二類型

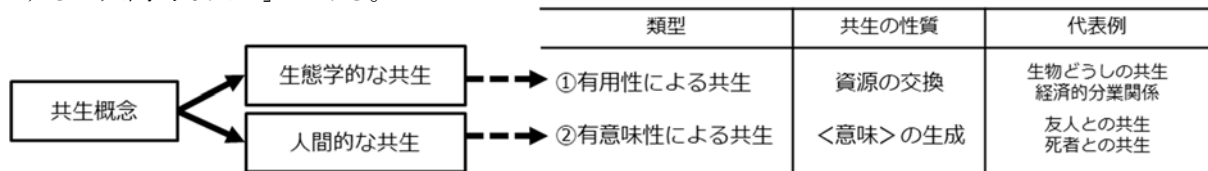
— 有用性による共生・有意味性による共生 —

八木景之

(大阪大学人間科学研究科 博士後期課程)

異質な人びとが共に生きる「共生」の推進が社会課題とされている。しかし、その基盤となる共生概念は、数十年にわたって論じられているにも関わらず、一定の曖昧さが残されている（宝月 2017）。今日の共生概念の由来の一つは生態学の共生概念(=symbiosis)にあり、社会科学の共生研究においても、生態学の共生概念がしばしば援用される。しかし生態学における共生（たとえば、アリとアブラムシの関係）は、共生する二者が、お互いを一種の「資源」として徹底的に利用しあう「人間的ではない」関係をさす。したがって、「生態学的な共生」から、社会における「人間的な共生」を導き出すことはできない、といった指摘がなされてきた（井上 2005）。しかし、「人間的な共生」とは何か。過去の研究におけるそうした考察には若干の不足があり、それが共生概念の曖昧さにつながっていると考える。

そこで報告者は、先行研究とは異なる切り口によって、「人間的な共生」の特徴をとらえることが重要であると考え、共生概念を次の二類型に分割することを提案した（八木 2020）。①「資源」を交換するなかで成立する共生と、②〈意味*〉が生じるからこそ成立する共生、この二類型である。①は、生存や利益獲得といった何らかの目的を達成するために、資源を持つ「有用な」他者を必要とし、その結果として共生が成立する、生物や経済の世界で見られる「生態学的な共生」である。それに対して②は、関係すること自体が目的であり、〈意味〉があると感じられるがために他者を必要とし、その結果として成立する「人間的な共生」である。



この二つの類型には、以下の差異・特徴が存在する。

(i) 共生①は、その資源の運動をある程度は客観的・物質的に観察することが可能であるが、共生②をひきおこす〈意味〉は主観的であり、明らかに心的世界（現象学的世界）で生じるものである。したがって共生②は、それを観察・体験する者が〈意味〉を感じた瞬間に現実化される。

(ii) 共生①は、資源交換が可能な「役に立つ」関係の間に成立する。したがって、資源交換が不可能である場合は成立せず、「役に立たない」ように見えるものは共生の輪から排除される。したがって、いわゆる社会的弱者との共生も、共生①の観点からは困難となるケースが想定される。しかし共生②は、そうした資源による制限を越えてゆき、さまざまな関係を成立させる。

(iii) 共生①と共生②に充足している生、すなわち他者との関係によって得られる「資源」と〈意味〉に充足している幸福な生においては、共生②は共生①よりも重要であることが実感される。同じ「友情」という現象であっても、資源交換のための友情①ではなく、そこに〈意味〉が生じる友情②が「真の友情」なのである。では「資源」よりも〈意味〉が重要である、と人間が実感するのはなぜか。報告者にはわからない。しかし人間がそうした傾きを持つという事実は重要である。

* 〈意味〉は、「異なる二者が、その差異を維持したままで、同一の認識枠組みの中に共に組み入れられた時に生じる、すなわち『多様』と『統一』が両立した際に生じる積極的な価値感情である」と定義している。〈意味〉の性質については、報告者の論文（八木 2020:41）で詳細に論じている。【文献】井上達夫, 2005, 「共生の作法」『ベルリン日独センター報告集』31: 23-29. 宝月誠, 2017, 「共生社会を目指して」福留和彦・武谷嘉之・宝月誠『共生社会論の展開』晃洋書房, 1-14. 八木景之, 2020, 「共生概念の二類型：有用性による共生・有意味性による共生」『共生学ジャーナル』4:30-54.